Special Interview
Izumi Oguri

Step Forward

ステップフォワード

40代の留学で手にした新たな自分とキャリアの広がり

枠にとらわれない心と行動力で世界を広げる

日本テレビ報道局政治部長兼解説委員

小栗 泉

小栗 泉（おぐり・いずみ）

青山学院大学英文学科卒業後、1988年に日本テレビ入社。社会部・政治部記者を経て、「NNNニュースダッシュ」「真相報道バンキシャ!」「NNNきょうの出来事」などでキャスターを担当する。2004年、アメリカ大統領選でヒラリー・クリントン上院議員に独占インタビューし、「ケリー氏支持」表明をアメリカのメディアに先駆けて聞き出した。2007年に退社、フルブライト奨学生としてジョンズ・ホプキンズ大学高等国際問題研究大学院ライシャワー東アジア研究所客員研究員・上級研究員として学び、帰国後日本テレビ再雇用制度第1号として復職。政治部デスク、副部長兼解説委員、「news every.」のキャスターなどを経て、2017年6月から政治部長の職に就く。

取材・文：伊東裕子　写真：松谷靖之（p.11、p.12）

>>日本テレビ政治部長として重責を担う

2017年6月、日本テレビ報道局に新たな政治部長が誕生した。夕方のニュース番組「news every.」のキャスターを務め、その優しい語り口と情報をわかりやすく届ける姿勢が好評の小栗泉だ。入社以来一貫して報道畑を歩いてきたが、今度は日本テレビの政治ニュースの全責任を担う立場になった。

政治ニュースは、1人で取材したものがそのまま放送につながることは少ない。例えば、自民党幹事長に取材した内容に対して、他の政党の反応や意向など、さまざまな情報を集めて原稿を作成する必要がある。小栗の仕事は、記者が取材しやすい環境を整えながら日々のニュースの方向性を管理することで、業務は報道のディレクションから労務管理まで多岐にわたる。異動以来、多忙な日々が続き、都議選のあった6月は2日しか休みがなかったが、同時に充実感を覚えているという。

「これまではわりとプレーヤー側だったので、ニュースとの向き合い方は広く浅くといった感じでしたが、今は政治の分野で知らないことがあってはいけないですし、みんなが迷っているときは私が決める立場になりました。そういう意味ではどっぷりと政治の世界に入るわけで、とても責任が重いのですが、やりがいを感じています。これはこれでものすごく面白いなあ、と」

>>社会問題を討論する面白さに魅了され、報道記者に

小栗が社会問題に興味を持ったのは、青山学院大学在学中に入った「ESS（English Speaking Society）」の活動がきっかけだった。先輩から「ディベートに向いている」と誘われ、英語での討論に挑戦した。「日本に原発は必要か」「タバコ問題はどうするべきか」など、さまざまなテーマについてリサーチし、賛成・反対それぞれのポジションに立ってディベートを重ねるうちに、「世の中にはいろいろな考え方がある」と気づき、社会問題を討論する面白さに引き込まれていく。また、英語と日本語では発想の仕方が違うことや、言語によって論理的な思考の積み重ね方が異なることを知り、外国や異文化に対する興味が広がっていった。就職活動の時期を迎えた小栗は、実社会でも社会問題に関わっていきたいと思うようになっていた。

「3年半、英語でみっちりディベートをやって、とても面白かったんですけれど、やはりどこかで学生レベルの机上の空論でしかなくて。もっと取材を重ね、実際の社会とのつながりの中でやっていけたらと考え、取材記者を目指すようになりました。日本テレビでの面接の際も『討論番組が作りたいです』と言いました。私の英語人生も取材人生も、大学時代のESSでのディベートに原点があるんです」

念願だった報道局に配属されて「ラッキー」と思ったのもつかの間、社会人1年目でいきなり皇居の「門番」の仕事を言い渡された。昭和天皇が倒れたばかりの頃で、皇居の門に張り付き、侍従や侍医の車のナンバーを覚えて、皇居に入った時間・出た時間を本社に伝えるという役割だった。結局、春夏秋冬を皇居の前で過ごすことになった。

>>新しい業務と向き合う中で生まれた新たな目標

現場でもまれながら10年近くたった頃、番組内で記者が直接伝えるコーナーができ、取材と並行して少しずつキャスターを担当するようになった。やがて、開局の頃から続いてきた伝統ある番組「きょうの出来事」のMCを任される。それまでベテランのアナウンサーが担ってきたポジションに抜擢され、震えながら日々の生放送に挑んだ。

「最初は自分が画面に出て話すことにかなり抵抗がありました。同期のアナウンサーを見ていると皆さん、かわいくて滑舌（かつぜつ）もよくて、そういう人たちが画面に出るものだろうと思っていましたし。記者であることのメリットをどう番組に反映させるべきか、すごく悩みました」

それでも番組の最後のひとことコーナーでは、記者として書いた原稿を元に「こういう見方もありますよ」という話し方をしたり、現場で記者と話すときは、自分の報道記者としての経験を生かしながらやり取りをするようにした。

2004年、同番組の取材で大統領選挙中のアメリカに渡り、ヒラリー・クリントン上院議員にインタビューした。事前に取材依頼書を送ったものの返答をもらえず、クリントン議員が遊説する先々に行っては「日本テレビです！」と追いかけた末、アメリカのメディアに先行して取材する許可が下りた。「これはニュースになる」と思えるところは押さえたが、日本の政治家へのインタビューに比べ、今一歩詰め切れなかったという思いが残った。その悔しさが、その後留学を決意する大きな理由の一つとなった。

「あと5年は今のやり方で仕事を続けていけると思っていましたが、その先のキャリアを考えると、20年間報道をやってきたジャーナリストとして、自分の専門分野をしっかり作りたいという気持ちがありました。それで、一度きりの人生だし、ずっとやってみたいと思っていた留学をしようと思いました」